

常呂川水系河川整備計画（原案）
（国管理区間）

平成 20 年 3 月 24 日

北 海 道 開 発 局

標高値は、2000 年度改正の新基本水準点に基づき表示しているが、必要に応じて旧基本水準点(2000 年度改正前)に基づく表示とし、その旨明記した。

目 次

1. 河川整備計画の目標に関する事項	1
1-1 流域及び河川の概要	1
1-2 河川整備の現状と課題	7
1-2-1 治水の現状と課題	7
(1) 治水事業の沿革	7
(2) 洪水の概要	10
(3) 治水上の特徴と課題	13
1-2-2 河川の適正な利用及び河川環境の現状と課題	14
(1) 現況の流況と水利用	14
(2) 水質	17
(3) 動植物の生息・生育・繁殖状況	22
(4) 魚類の遡上環境等	27
(5) 河川景観	28
(6) 河川空間の利用	29
(7) 河川の適正な利用及び河川環境上の課題	30
1-3 河川整備計画の目標	31
1-3-1 河川整備の基本理念	31
1-3-2 河川整備計画の対象区間	32
1-3-3 河川整備計画の対象期間等	34
1-3-4 洪水等による災害の発生の防止又は軽減に関する目標	34
1-3-5 河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持に関する目標	36
(1) 流水の正常な機能の維持に関する目標	36
(2) 河川水の適正な利用に関する目標	36
1-3-6 河川環境の整備と保全に関する目標	36
(1) 河川環境の整備と保全に関する目標	36
(2) 河川空間の利用に関する目標	36
2. 河川整備の実施に関する事項	37
2-1 河川工事の目的、種類及び施行の場所	37
並びに当該河川工事の施行により設置される河川管理施設の機能の概要	37
2-1-1 洪水等による災害の発生の防止又は軽減に関する事項	37
(1) 洪水を安全に流下させるための対策	37
(2) 内水対策	41
(3) 広域防災対策	42
2-1-2 河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持に関する事項	43
2-1-3 河川環境の整備と保全に関する事項	43
(1) 河畔林の保全、河岸の多様化	43
(2) 魚類等の移動の連続性	44

(3) 河川景観の保全と形成	44
(4) 人と川とのふれあいに関する整備	45
2-2 河川の維持の目的、種類及び施行の場所	46
2-2-1 洪水等による災害の発生の防止又は軽減に関する事項	46
(1) 河川の維持管理	46
(2) 危機管理体制の整備	52
(3) 災害復旧	54
2-2-2 河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持	55
並びに河川環境の整備と保全に関する事項	55
(1) 水質の保全・改善	55
(2) 水質事故への対応	55
(3) 渇水への対応	55
(4) 河川空間への適正な利用	56
(5) 河川美化のための体制	56
(6) 地域と一体となった河川管理	56

1. 河川整備計画の目標に関する事項

1-1 流域及び河川の概要

「北海道の地名^{注)}」によれば常呂川という名は、アイヌ語の「ト・コロ・ペツ」(沼・を持つ・川)に由来している。

常呂川は、その源を北海道常呂郡置戸町三国山(標高 1,541m)に発し山間部を流下し、置戸町勝山において、仁居常呂川を合わせ置戸町、訓子府町を経て、北見市内において無加川を合わせ、北見盆地を貫流し、狭窄部を流下し仁頃川を合わせ、常呂平野を経てオホーツク海に注ぐ、幹川流路延長 120km、流域面積 1,930km² の一級河川である。

その流域は、北見市(平成 18 年 3 月、北見市、端野町、留辺蘂町、常呂町が合併)、訓子府町、置戸町の 1 市 2 町からなり、オホーツク圏における社会・経済・文化の中核をなしている。

常呂川の河床勾配は、三国山から置戸市街部付近に至る源流部は 1/30～1/150 程度、置戸市街部付近から無加川合流点付近に至る上流部が 1/150～1/300 程度、無加川合流点付近から仁頃川合流点付近に至る中流部が 1/300～1/600 程度、仁頃川合流点付近から河口に至る下流部は 1/1,400～1/5,000 程度である。

流域の土地利用は、山林等が約 82%、農地が約 16%、宅地等の市街地が約 2%となっており、流域内は森林資源等に恵まれている。

流域は農業、水産業が盛んで、中下流部は農地として明治初期からひらけ、河口沿岸ではホタテの養殖などの漁業が行われており、タマネギや甜菜、ホタテの全国有数の産地となっている。

注) 「北海道の地名」：山田秀三著

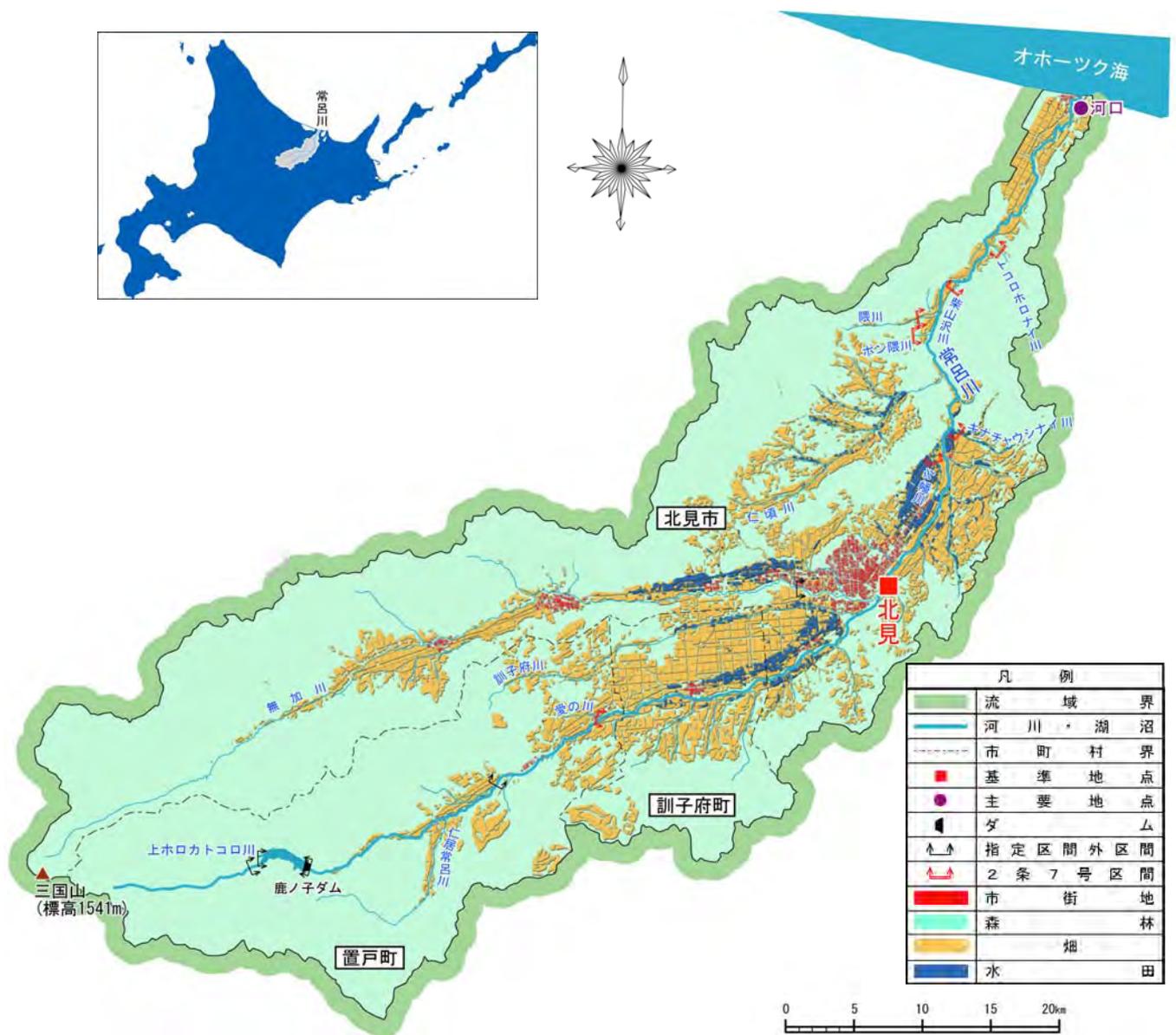


図 1-1 常呂川流域図

流域の気候は、オホーツク海側気候区に属し、梅雨や台風の影響を受けることが少なく、道内では比較的温かな気候である。

流域の年間降水量は約 800mm と全国でも降水量が少ない地域であり、特に、春から夏にかけての降水量は極めて少ない。

流域の地形は、大きく、山地、丘陵地、台地、低地の 4 種に分類される。

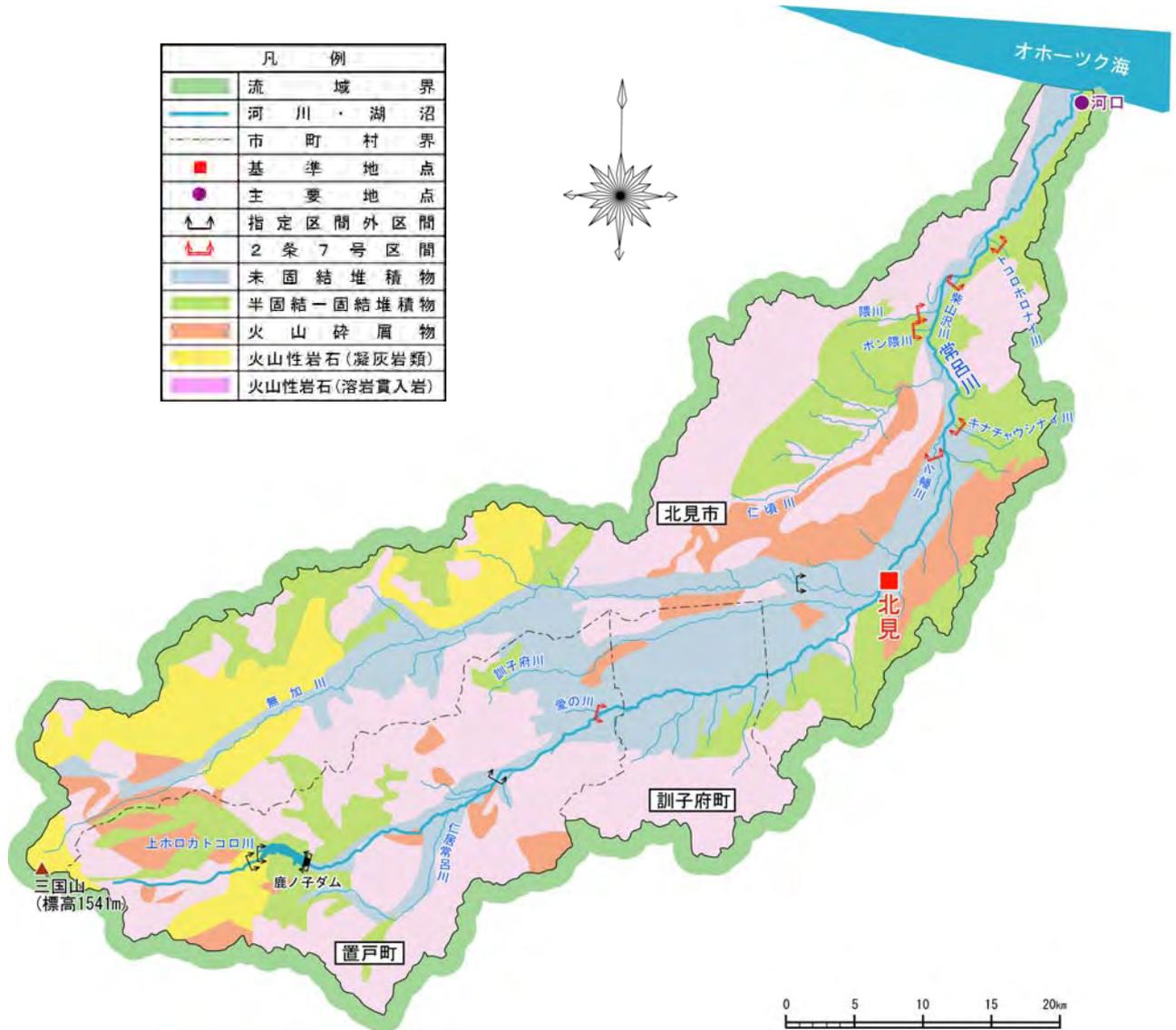
山地は、大雪山系の東端から支湧別^{しゅうべつ}山地、置戸^{ちこ}山地、仁頃^{にころ}山地など、広い範囲に分布し、比較的急峻な大起伏山地である源流部をはじめ、地域全体としては小起伏が多い。

丘陵地は、北見台地と仁頃台地を分ける北見丘陵地や、サロマ湖^{の、とろ、こ}と能取湖との間から北見盆地まで延びた常呂丘陵地、北見東方の北見台地と網走川流域^{あぼしり}の美幌^{びほろ}台地を隔てる栄森^{さかえもり}丘陵地がある。盆地は、北見市を中心とする北見盆地が代表的なもので、常呂川本川や支川の無加川、訓子府川などにおいて、数段の河岸段丘群^{か、が、ん、だん、きゅう}を形成しており、網走地方における最大の内陸凹地となっている。

また、仁頃山地と北見丘陵地との間の仁頃川流域には仁頃台地があり、また、無加川上流には小規模に発達した段丘地形である温根湯^{おんねゆ}台地がある。

低地は、サロマ湖の砂州および砂丘、三角州、扇状地を含む常呂低地が、流域内としては常呂川河口付近に狭い範囲で分布する。

流域の地質は、主に火山岩や火山砕屑岩からなる新第三系が分布する西部地域、白亜系や先白亜系が分布する中部地域、新第三系の非火山性堆積岩類が分布する東端部地域に分けられる。また、常呂川本流の中・下流域には、砂礫を主体とした第四紀更新世の段丘堆積物が分布し、特に北見盆地ではかなりの広範囲に認められ、河口付近には厚さ2～3mの低位泥炭の分布が認められる。



(出典：土地分類図(北海道VI 網走支庁)
財団法人日本地図センター発行)

図 1-3 地質図

流域の主要な交通網は、旭川市から北見市、網走市方面に通じる国道 39 号、網走市から稚内市に至る国道 238 号、北見市から佐呂間町、旭川市方面に通じる国道 333 号、遠軽町方面から北見市、置戸町を通り、帯広市方面に通じる国道 242 号などがある。また、道央圏とオホーツク地方を結ぶ JR 石北本線(新旭川～網走)をはじめ、現在、網走市と北見市および陸別町を結ぶ地域高規格道路整備の計画が進められているなど、交通の要衝となっている。

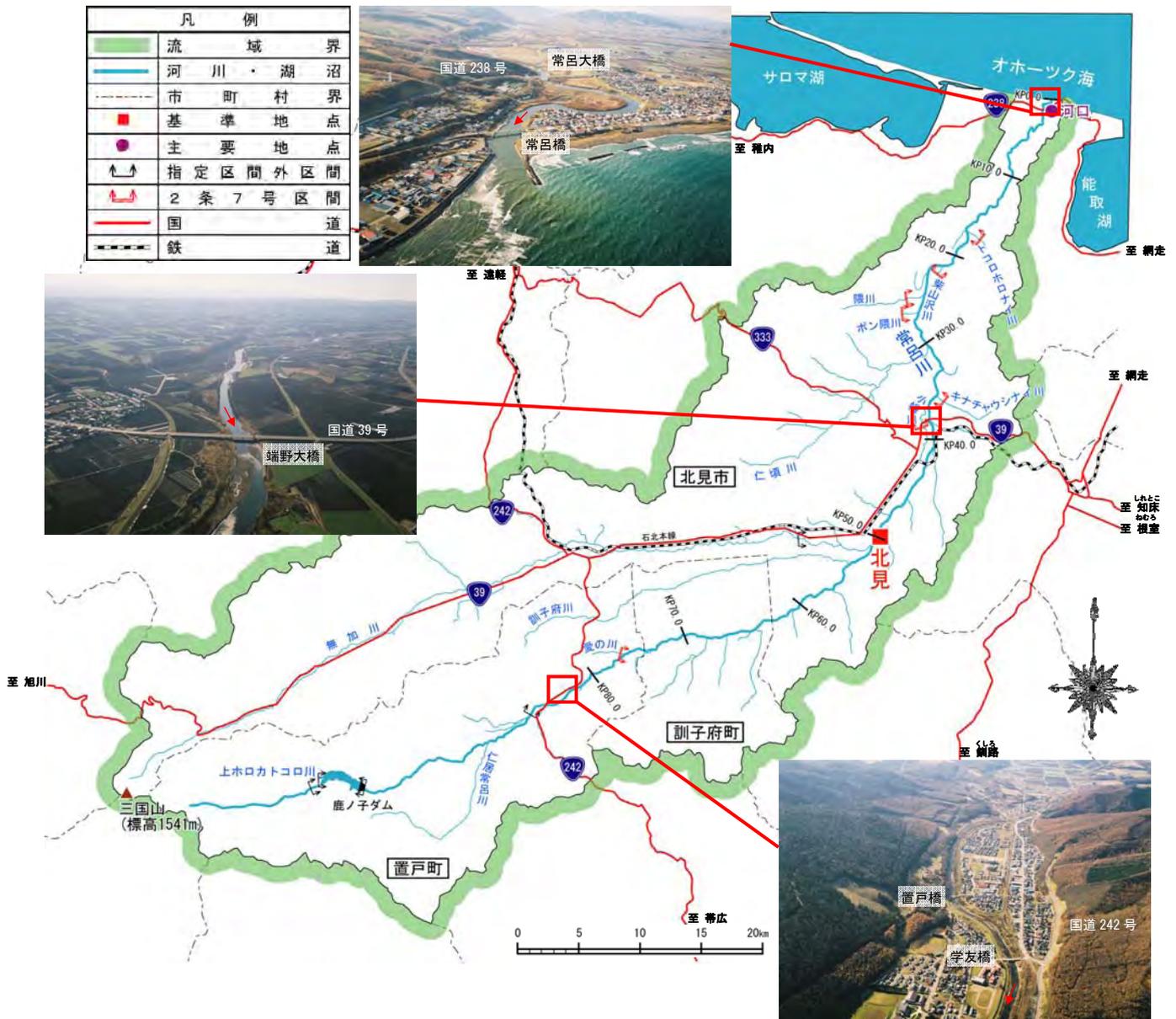


図 1-4 基幹交通施設位置図